バベルの塔

愚かさを描くのなら——

ウィーンの美術史美術館を訪れた時、ブリューゲルの「バベルの塔」を観た。教科書か参考書か何かで昔何度も見たことのあるその画を前に記憶が蘇る。

「神にも届く塔を建てて、名声を手にしよう」

傲慢な人間たちが、自分たちが一番の存在だと証明するために建てはじめた塔がこのバベルの塔で、それを見た神が、「みな同じ言語を話す一つの民だからこのようなことを企むのだ」とお怒りになった為、人々を何種類もの言語に分かち、世界中に散りじりに飛ばした——という作品らしい。建設途中の塔に不穏な悪雲がかかる様子や、もしもこの塔が頂上まで建設されたとしてももうすでにこの時点で少し傾いており、絶対に完成させることができない角度で描かれているという。

ふと思い出したのは小さい頃に読んだ物語で、この世界の人間たちは実は水槽の中で飼われている金魚たちのように何者かによって実験観察されている、というような内容の物語だ。今まで生きてきた中でもいくつかの宗教を勉強する機会があったことから、人智を超えた未知なる世界とやらにとても興味がある。日々の中で、興味のある分野や新しい仕事、友人との約束にワクワクと胸が躍るような感覚を味わう事があれば、反対に何もかもが無意味のような、それでいて絶望とはまた違ったような、何とも言えない感覚に襲われることが最近は頻繁にある。

この感情が一体どこからきているのか、何からきているのか。人生に意味など無いとよく言うけれど、本当に無いのか。答えはどこにもなく、自分自身で見つけるしか無いのだが。きっと全ての人が例外なく。

こういった類の、探しても答えも正解もない、このようなことを普段から考えない人にとっては全く無駄な夢物語を頭の中で巡らせては、上手く言語化できず誰にもシェアできる事もなく脳内で不完全燃焼に終わっていく。そんな不完全燃焼のかけらたちを、これらの偉大なアートたちが燃やし尽くしてくれる。

バベルの塔の土台がもうすでに傾いていることを知らずに建設を続ける民たちの描写が、心に残った最後の残り破片を燃やしていく。力を過信した企てに対する人間の傲慢さや愚かさに警鐘を鳴らすこの絵画も、描いたのは人間。人生は自分次第でどうにでもなる、といったような内容の自己啓発本が世に溢れているが、正直私は疑問を抱いている。生きていく中での気付きやら決断や出会いも全て含めて、元々そうなるように決まっていたのではないかと思うのだ。目に見えない、感知できない、想像すら及ばない何か大きなものの流れの中にいるような感覚がある。

そんな言葉にすればするほどよくわからなくなってくる心中を一瞬で説明してくれたのが私にとってのブリューゲルだった。絵画に描かれた人々の視点。それを描いた視点。それを現代で見上げる私を、さらに上の次元の何者かが見ているのかもしれない。愚かさを描くのなら、とびっきり皮肉めいていてほしい。この絵画を外から眺めていると錯覚している自分も含めこの愚かさの一部であるというような。

慢心や傲慢といった、この世では悪い意味で表現されている事柄さえも作品を通してアートに昇華させられ、今日も多くの人を楽しませている。それは人間が作り出した善悪の概念を超えた所に存在する何かが、私たちの愚かさを美しいものとして楽しんでいる視点があり、きっとそれは私たちの中にもあるのだ。

なんて一人見上げながら考えてみる。

azufeeling